

# 齒車家族

arohanakayama

どうも、最近、体の調子がおかしい。

おととい辺りから、歩行に違和感を感じていた。くるぶし付近の関節が痛む、おまけに視界に紗がかかったようでお父さんの顔も歪んで見えていた。

昨日は、歩いていると硬く冷たい異物がお腹の中で転がっている音が聞こえる気がした。ガランガランと金属が当るような音だ。

病気なのだろうか？

きっと、僕は病気なのだろう。

「病気？何を言っているの？あんた馬鹿じゃないの？」

由美子さんは、僕をあざ笑うようにそう言う。

そしたら今日だ。

部屋を歩いていると、曲がり角の柱に足の小指をぶつけてしまった。足の指をぶつけるなんて僕の空間把握能力が衰えて来ている証明なのだけど、それよりも驚いたのは、ぶつけた際に足の小指が取れてしまった事だ。

ころころと床に転がる指。

僕はそれを手にとって、じっと眺めた。

小指の裏にはネジのような溝がついている、別に折れたわけじゃない。ただ、足の付け根から外れてしまっただけだった。

由美子さんは、その姿を見て苦笑している。

「全く、安物はだめねえ」

僕は安物らしい。

確かに、そう言われてみれば、最近では体の部品が外れることが多くなった。安物ってのもあながち間違いじゃないが、それより自分がロボットだってことを忘れかけていたという事実のほうがショックだった。

どうにも、脳幹部のICチップにまでも異常をきたして狂っているのかもしれない。

由美子さんが、イスに座ったまま僕にこう言った。

「テレビで言っていたのは本当なのね、I Z-1200タイプのお手伝いロボットに工場出荷

段階での初期不良が見つかったって」

初期不良？そうか、僕の体にはもともと機械的な問題があるんだ。

「メーカーは、回収を始めたって言うから、あんたも、もうすぐ引き取られて別の新品ロボットと交換されるんでしょね」

そう言って、けらけらと由美子さんは笑う。

僕は悲しくなった。

この家に来てから、お父さんには特に可愛がられて、性格は悪そうだけど、由美子さんと三人で曲がりなりに幸せな家族だった気がしていた。

一生懸命に家事はこなしたし、何のミスも犯したこともない。

だけど、僕はこの家を出て行かなくてはならないらしい。

大好きなお父さんとも離れなくてはならない。だけど、仕方が無い、僕がこれ以上おかしくなって家族に危害を加えるなど、それは望みもしない不幸な事態だから。

せめて、その日が来るまでは問題を起こさないように、勤めて冷静に着実にゆっくりと仕事をこなす事にしよう……それがせめてもの家族へ僕からの最後のお礼だから。

ある晴れた日、お父さんは作業服を着たロボット業者の人を連れて家に帰ってきた。

ああ、いよいよなんだ。

僕は連れていかれる、新しいロボットと交換されてしまい、この家に来ることは二度とないのだと思った。

僕は二人の制服の男に囲まれ、背中を開けられてしまう。

電源を落とされ、意識はゆっくり薄れてゆく。

僕は静かに目を閉じ、お父さんと由美子さんにお別れと、今までお世話になったお礼の言葉を二人に聞こえないなりにICボックスの中で告げたのだ。

「はい、終わりました」

作業員の声が再び聞こえたのは、電源を入れられてソフトを再起動した直後。

「メンテナンスが遅れていたようで、複数の部品が故障していました。全て交換しておきましたので」

作業員がお父さんにそう話していた。

「そうか、最近忙しくてね、故障にも気がつかなかったものでね・・・ともかく、直ってくれて良かった」

お父さんは笑顔でそう言っていた。

僕は驚いていた。てっきり、回収されるとだけ思っていたのにどうしてだろう？

僕は初期不良のはずなのに。

「私の家族だからな、新しいのに交換するだなんてどうにも寂しくて・・・」

作業員に向かって笑顔でそう話すお父さんの顔を見ていたら、僕の体に張り巡らされたチューブ

の中の機械液の温度が上がっていた。

それは、人間に例えたら、感涙の状態。

人口の目からは、涙こそ流れないけれど、嬉しくて嬉しくて、マシン言語の0の数が勝手に増えるくらい感動していた。

これからも、この家で暮らせる。

また三人の生活の中で、僕はこれからも生きていけるんだ。

由美子さんは、そんな僕を見て眉を潜めていたけれど、僕は最高に嬉しかったんだ。

ところが、それからすぐの事。

部屋の掃除をしていると、別の業者の人間が数人ほど、家を訪れた。

制服の胸に刻まれた刺繍は、あの「I Z-1 2 0 0タイプ」を製造しているメーカーの刺繍だった。

やっぱり、僕は回収されるみたいだ。

メーカー社員とお父さんは話していた。

「……やはり、回収してしまうのかね？」

「ええ、不具合が見つかりましたので、残念ながら見逃すわけにはいかないのです」

「……家族なのだが」

「お気持ちは分かりますが、その不具合とは、自分の事を人間だと思い込んでしまうというものなのです。これは家庭用ロボットとしては致命的で危険な不具合なのです」

お父さんは、そう聞いて悲しい顔をしたが、どうにか納得はしていた。

僕も悲しかったけれど、家族を傷つけるくらいなら、潔く回収されようと心に決めていた。

ゆっくりと部屋の中を見回して、少しでもここで過ごした記憶をICに刻み込もうと懸命に努めていた。

奥の部屋に座る、由美子さんと目が合う。

彼女は僕に手を振っていた。

彼女は笑っていた。もう、すでに僕との別れなんて少しも気にも留めていないのか、すぐにテレビのほうを向いてしまう。

僕はそれでも彼女の背中に手を振り続けた。

「それでは、はじめますね」

社員たちは、拘束用の鎖を構えて作業を始める。

僕は、力を抜いた。

「それでは、失礼します」

玄関先で社員たちはお父さんに頭を下げて、トラックに乗り込む。

荷台には、鎖でがんじがらめの怒った顔のまま電源を落とされた由美子さんの姿が見えた。

僕は、玄関先でお父さんに肩を抱かれたまま、その光景を呆気にとられて見ていた。

お父さんは言った。

「由美子も家族だったのだから……仕方がないことだ。また新しい家族を買うことにしよう」

小さく頷き、小さくなってゆくトラックを見送った。

僕はロボットなのだって事を絶対に忘れないようにして、

ここで生きていこう。

了